

風狂

第61号

風狂の会

風狂（第61号）目次

【詩】

宝峰湖	出雲筑三
爆弾散華	長尾雅樹
夜気	なべくらますみ
笑い和社会	高村昌憲
お義母さん	高 裕香
兎 一夢の記憶（3）—	原 詩夏至
雨屋敷	富永たか子

【風狂ギャラリー】

三浦逸雄の世界（四十五）	三浦逸雄
--------------	------

【エッセイ】

敗戦の頃の日々（後編）	神宮清志
昭和は遠くなりにはけり？（5）	高島りみこ

【童話】

パンケとペンケ	宿谷志郎
---------	------

【翻訳】

アラン『芸術論集』（一）	高村昌憲訳
--------------	-------

執筆者のプロフィール（五十音順）

どこまで追ってきやがる
この上 何が欲しいのか
霧が波打つ秘境に軍靴が迫る

略奪を国益と称し
骨の髄までしゃぶる奴ら
弱いと判ると遠慮してこない

かけがえのない犠牲を払って
多くの財を失った
戦うのは所詮むいていない

我らしか知らない詞で
侵略者はどこから来るのか
弱者の知恵を絞ろう

民族衣装も軽やかに
笑顔たやさず敵情を歌に託せ
準備を整え鬼どもを退散させよう

敵が来たぞう
南の峠から兵五百
西の川から騎馬三十騎

あゝ急いで歌から歌へ
峰々からサイレンが木霊する
お腹からの澄んだ声

近年 宝峰湖[※]は観光地になった
少数民族の美しい恋の唄です
今も真相は語られることはない

※ 宝峰湖：ほほうこ・世界自然遺産・湖南省張家界市

昭和二十年八月十二日川端龍子邸は

B二十九による直撃弾によって

母屋の潰滅の後の

戦火を免れた別棟の六十畳の画室で

「九死に一生を得た体験です」と

爆弾で散華するさまを

南瓜、トマト、茄子に託した

吹き飛んだ蔓や

赤い実の散乱

南瓜は転倒して

茄子の花は引き千切られて

青葉が青茎が畑の中で

あられもなく無惨に絡みついている

着弾の後の大きな爆発音が

木端微塵の野菜が空間に跳ね上り

命拾いの視線が

一瞬の静止画像を捉^{とら}えて

叩きつけられた果実が

閃光^{せんこう}の彼方に危く存在する

龍子の観察は野菜の末路を

例を見ない花鳥画として

画像を定着させて

そこに込められた恐怖の心像が

悪夢の結末を^{あば}発^はき出そうとする

死者の目で生者を見る視点から

死は一定というが

理不尽の死の向こうの

戦争という現実があることに

終戦間際の酷烈な事実が

散華する野菜の姿で硝煙を辿る

昼じゅう続いた雨は止んだ
まだ霪のような 強い湿気は残っているが

茂る街路樹の向こうにある
一か所だけ明るいところ
あそこは確か月極めの駐車場
いつもがらんと空車場所が多い

風もないのに光るものが揺れる
大きく 小さく
ぼんやりと
今夜は何台かの
車が止まっているらしい
揺れる灯かり
気になる明かり

光りが揺れる
揺れ続ける
風もないのに
あの明りは前触れなのか
何が起こるのか
何が起きるのか

ヒカリガユレル
ユレツツケル
カゼモナイノニ
ナニカガオコル
ナニガオキル
ユレル ユレル
オトガ ユレル

音はしていない筈なのに
音を感じる
湿気が重く漂う
また 雨が降るのだろうか

相手の外見が可笑しいから人は笑いますが
相手が真面目腐っている時も人は笑います
現在の顔が滑稽になる時も笑い出しますが
過去の顔を思い出しても笑って仕舞います

敬意が相応しくない時も否定の笑いがあり
自らの判断力と生命が美しい同意をします
肉体は嘘に対して直ちに反応するのであり
精神と肉体を両立させるものは無いのです

崇高な動きに対して肉体は少し臆病になり
精神は外観から解放されて自由になります
臆病の時も悲しい時も辛い時も笑いを作り
精神から解放されて取るに足りなくします

勿論自然は長い間少しも滑稽ではないので
人間だけに固有の笑いの表情は人工的です
精神は信頼と友好を前提に笑いを作るので
自然にも動物にも人間の笑いは無いのです

底意の無い笑いには個人的な率直さがあり
精神性と優しさを意味せずにはられません
人が笑う時にはその意味を知ることであり
反対に社会の中ではそれ程多く笑いません

お義父さんを亡くして5年
4年間、一人暮らしのお義母さん
今は、アルツハイマー型認知症。

月日も季節も場所も
抜け落ちたように忘れ
自分の名前しかわからない。

本名があること
在日であること
すべて忘れて日本名しか言えない。

亡くなった兄弟が生きていたり
夫がいたことも、
お墓に入っていることも知らない。

毎日、二人の孫の名を呼び
「今日は来るのか？」
「何をしているのか？」と繰り返す。

時々、私が介護に行くと
「大変ね！大変ね！」と言い
「ありがとう。また来てね。」と笑う。

加齢と孤独の果てなのか？
今は、長男が夫であり、
彼の愛の中で生きている。

いささか酔ったので
 帰りはタクシーで——と
 考えたのが
 どうやらいけなかった。

鬼火のような
 「空車」ランプを求めて
 見知らぬ道
 見知らぬ道へと
 おびき出されながら
 私は
 自分がどこにいるのか
 いつしか
 すっかり見失っていた。

警報が鳴り
 遮断機が下り
 見知らぬ列車が
 見知らぬ線路を
 長々と
 かつ素早く通過した——

あたかも
 囚人の首を横切る
 死刑執行者の
 斬首の
 刃のように。

だが
 警報がやみ
 遮断機が上がり
 向こう岸が再び見えた時
 そこにはもう
 道など
 ないのだった。

ただ
 眼の前の深い闇から

とうとう

一台のタクシーが現れ――

「空車」ランプを

空しく燃やしたまま

私にも

他の何にも目をくれず

背後の

同じく深い闇へと

兎のように

走り去ったのだった。

床も抜け落ちた
底の抜けたつゆ空から
滝の雨が流れ込んで

転た寝に
梅雨屋敷の夢を見た
梔子の純白 匂いは痛い

広大な地に
雑々と草は
身をすり寄せて繁茂する

い
去くのも止まるのも
どん詰りの時期がきた
当らずとも
遠からず

ひたひたと落城の気配
崩壊の兆は
つゆの晴れ間
漂う霧の
寄り合い玉となり
ひとしずくの
いまにも落ちようとする
ふくらみ

どん詰りの静寂
忍び寄って触手を伸ばし
ひとつの時代を終える

太った葡萄を
一粒 一粒 噛んで耐える



三浦逸雄「ヒメジオン」8号（アクリル・紙）2019

「寺子屋教育」始まる

昭和二〇年も春を過ぎる頃になると、全校生徒のほとんどが疎開してしまい、学校の校舎は陸軍の兵舎に早代わりした。われわれのように疎開に行かなかった生徒は、全校で一四〇名居たと「経堂小学校沿革史」に記録されている。その沿革史によれば、その生徒たちは世田谷三丁目町会事務所、船橋町天理教会堂などに集められて勉強を続けたとある。その「寺子屋教育」が始められたのは六月一五日からである。われわれ船橋に住む児童は近くの天理教の会堂に通った。一年生から六年生までの五〇人くらいの生徒を、一人の女の先生が面倒を見てくれた。この先生は土屋先生といって、献身的によく教育に尽くして下さった。戦争が終わって学校が再開されたとき、この先生の姿をみることは出来なかった。献身的な人から先に死んでいった印象が強く、この先生も亡くなられたのではないかと思った。

初夏の頃、陸軍の兵士三〇人くらいが隊列を組んでわれわれの家の近くへ行進してきた。みな鉄砲を担ぎ、なかの一人は機関銃を担いでいた。隊長と思いき兵士が大声で怒鳴ると、一人の若い兵士がなにか答えた。これも異様に大きい声だった。するといきなり隊長がその兵士を殴り始めた。側にいた子供達はその異様さと怖さに震え上がった。その場に居た三人くらいの子供達は、その日ほとんど言葉を交わすことなく、黙りこくっていた。その恐ろしさにみな一様に胸をふさがれていたのである。

来る日も来る日も空襲に追われていた頃、一軒に一本の手ぬぐいが配られた。真ん中に日の丸、その両脇に黒く「神風」と染められていた。これはいざというとき鉢巻を締めて戦うためのものだ。神聖極まりないものとして、大切に扱うのが当然と信じられた。近隣に在日韓国朝鮮人が住んでいて、あまり近所との付き合いもなく、何をもって生計を立てていたのか謎めいていた。少し年上の女の子が居て、可愛い子だった。あるとき遊びに行くと、歓迎されてその頃ではご馳走の乾パンを皿に盛って出してくれた。あるときこの家の前を通りかかったとき、風呂場の中に「神風日の丸」の手ぬぐいが掛けられているのを、開いた窓越しに見た。神聖極まりないものを入浴に使っていたのである。憲兵にでも見とがめられたらどうなるのだろう。恐ろしくて足がすくむ思いだった。今から思うと、この家の人たちには、敗戦が見通されていたのかもしれない。

初夏の頃のある日、B29に高射砲の弾が当たり黒い煙を吐いてしだいに落ちて来た。すると落下傘が開いて一人の米兵が降りてくる模様である。われわれはそれとばかりにそのほうへ走った。しかしこれがなかなか地上に達してこない。ばかりか風に吹かれてしだいに遠ざかり、けつきよく追いきれなかった。あとで聞くとところによると、これは女性航空兵で目隠しをされてどこかへ連れ去られたという。そのとき、次のような話が伝わってきた。「日本上空へ三〇回出撃すると、本国へ帰ることが許される。自分は一九回目だった。本当に悔しい」と泣いていたと話してくれる母の調子には、どこか同情的なものがあつた。取り返しのつかない運命を思いやると、果てしなく暗い気持ちになった。

その翌朝、近くの工場敷地内で、撃墜されたB29の搭乗員の遺体が公開された。近所の大人達に混じってわれわれも見に行った。遺体は全部で一〇体あつた。そのうち初めのほうに寝かされていた遺体は、傷もなく綺麗だった。米軍は鬼畜米英と言われ、鬼のように恐ろしい奴らと教えられていたし、そう信じていた。しかし実際に見る米兵はすこぶる色白でか細いからだ、少年のように若く綺麗な顔立ちをしていた。この遺体に接して言い知れぬショックを受けた。地面に寝かされたアメリカ人の若者の遺体には、つい今しがたまで生きて陽気に振舞っていた雰囲気を感じられたばかりか、すこぶる親しいものさえ感じさせたのである。異国の地面に転がされた、いたいけな少年とも見える若者達、細い金髪が額にまつわりつき、眠るように地面に横たわっていたのだ。このときの言葉にならない衝撃はあまりに強烈で、戦争という現実の生々しさに圧倒された。哀れとか、可哀想とかいうのはまだ甘い、涙も出ない、言葉に表しようのない衝撃的な現実、これはずっと後々まで、幾度も目の当たりによみがえってきた。

いつ自分の住まいが焼かれるか分らない。そこで身一つで逃げる事が出来るように、準備しておくことが義務付けられた。まず寝るときは洋服を着たまま寝ることになった。慣れないうちはごろごろして寝にくいことおびただしかった。一番大切なものを身に付けて逃げられるように、一つの風呂敷包みが作られた。それを斜めに背負って逃げるようにいつも用意していた。それになにを選ぶべきか、母は苦心していた。けっきょく日ごろ使っている物だけでいっぱいになった。特別の宝物はないもので、日常使っているものが一番大切なのだということになった。

初夏のころのある日、空から大量のビラが降ってきた。米軍が撒いたもので、パラパラと無数に舞い降りてきた。大きさはA5くらいで、稚拙なイラストが描かれ、一人の日本人と思しき人物が火に焼かれていた。早く戦争を止めろという意味のことが、妙にこなれない文章で書いてあった。「ナチスドイツは敗れたり」という一句だけ覚えている。また別のビラには、魚の絵が描かれ、戦争を終えると魚が食べられると書いてあった。間もなくこれらのビラを絶対に見てはならないと言われ、近くの部隊の兵が来て拾い集めていった。持っているだけで罰せられることになり、誰も側にも寄らなくなった。

八月一五日

いよいよ戦争末期に広島・長崎に新型爆弾（原爆）が投下されると、全体がこの世ならぬ異様な感じになってきた。これから原爆が雨のように降る、それを避けるには赤飯とラッキョウを食べるとよいという。この言葉を信じた周辺の人たちは、みなその用意をして赤飯とラッキョウを食べた。わたしも久しぶりにこのご馳走にありついてその美味さを味わった。いわばこの世の別れの儀式みたいなものだった。

真夏のある日、隣のお屋敷から声がかかって、重大放送があるから聴きに来ないかと誘われた。母と兄とわたしの三人がお邪魔をした。広い庭を見渡すお座敷に通された。玉音放送を聞いたのである。わたしはなにがなんだか分らなかった。ふと気付くと正座した兄が嗚咽していた。母もやがて泣き伏した。

その日は朝から真夏の太陽が照り付けていたが、妙に森閑としていた。いつもやってくる米軍機がまったく来なかったのである。その数日間は空襲がほとんどなかった。下駄履きの米軍飛行機がのんびり飛んでいるのを見た。これは海軍の水上飛行機で、水上で滑走できるように船の形をしたものを付けたもので、「下駄履き」と呼んでいた。戦争は終わったのだということはすぐに分かった。今日からあの「ポー」を聞かなくてすむという思いが真っ先に浮かんだ。警戒警報の「ポー」を聞くのにうんざりしていたのである。夕方に、ザーっつとひととき雨が降った。夕立だったのだろうが、人々は「涙雨だ」と言い合っていた。「特攻隊で死んでいった人が可哀想だ」と母は夕方薄暗い台所でまた涙を浮かべた。

幾日か経って、篠崎さんの家の台所で一家が揃ったとき、話が大いに弾んでいた。「東条さんもちよつとやりそこなったんだよ」と、庇護するような発言が好意をもって迎えられていた。「天皇陛下も苦勞されてしまつて」という言葉も聞かれた。こうなつては仕方ない、という諦めに似た雰囲気の中には、ある種の明るさもあつた。談論風発して尽きない賑やかさがあり、絶望的な雰囲気はなく、むしろ活気があふれていた。日本が負けるのは当然で、初めから分かつていたようなことを誰かが言い出すと、一様に同感の声が聞かれた。つい昨日まで日本は絶対に勝つと言つて疑わなかつた者が、数日にして現実を受け入れてしまうという姿に驚いた。上の者の責任は一切追及しない、目の前の現実をあつさり受け入れる、という日本の庶民の典型がここにある。

それにしても戦中という非常時にこうした農家の人々と共に過ごせたことは、よかつたと思つづく。何が起ころうとも、昨日に続く今日で百姓仕事を変わず続けていた。戦争が終わつてもなにも変わらずその日から野良に出て働いていたし、いつもと同じように青空に太陽はどつかりと居座つていたので。（了）

かれこれ四十年近くも前になる私の大学生活であるが、極めていい加減であった。いや、考えてみれば大学生活だけでなく、その後の人生、今に至ってもかなりいい加減なものではあるのだが.....。

油画専攻だったため、入学してしばらくは当然のことながら油絵を描いていた。あるとき、様々な絵画の技法が載った本を手に入れ、その中のテンペラに惹かれてからはテンペラ画を描くようになった。テンペラにもいろいろな手法があるようだが、私が手に入れた本では、画布は板に麻布を膠で直接貼り、その上に下地として、湯煎にかけた膠に石膏を流し込んだものを何度も薄く塗るというものだった。下地が乾いたらヤスリをかけて平坦にし、絵の具は顔料に卵の黄身と少量の水を混ぜたものを加えて使っていた。絵の具の乾きの速さと発色の鮮やかさが抜群だった。材料が生ものだから、大学内では絵を描かず、もっぱら下宿先に籠もって、気合いの入っているときは明け方まで描いていた。そんな生活だから、大学に顔を出すのは単位を取得しなければいけない授業のあるときだけだった。卒業できる最低限の単位数を取ればいいと思っていたので、たまに学校に行って授業が終わってもすぐに帰らず、学食に入り浸って友人たちと雑談をかわしていた。夏期講習などにも出席して何とか単位を取得していったが、最後までだらだらと先延ばしにしていたのが体育とフランス語だった。

絵を描いていた頃の私は、絵筆が持てる体力以上のものは不要だと考えていた。そのため大学の体育の授業は面倒くさく、苦痛だった。今でこそキックボクシングに嵌まって、週三、四日のトレーニングにいそいそと出かけて行くが、当時は「何が楽しくって、そんなに肉体を追い込むわけ？」と、スポーツをする人たちの気持ちがさっぱり理解できなかった。私のような体力ゼロ、運動軽視の学生も結構いたのだろう。受けた授業はおよそスポーツとは呼べない「裏山のお散歩」という実にユルイもので、山というほどの傾斜もない林の中を練り歩いて、卒業間近にやっと体育の単位を取得した。

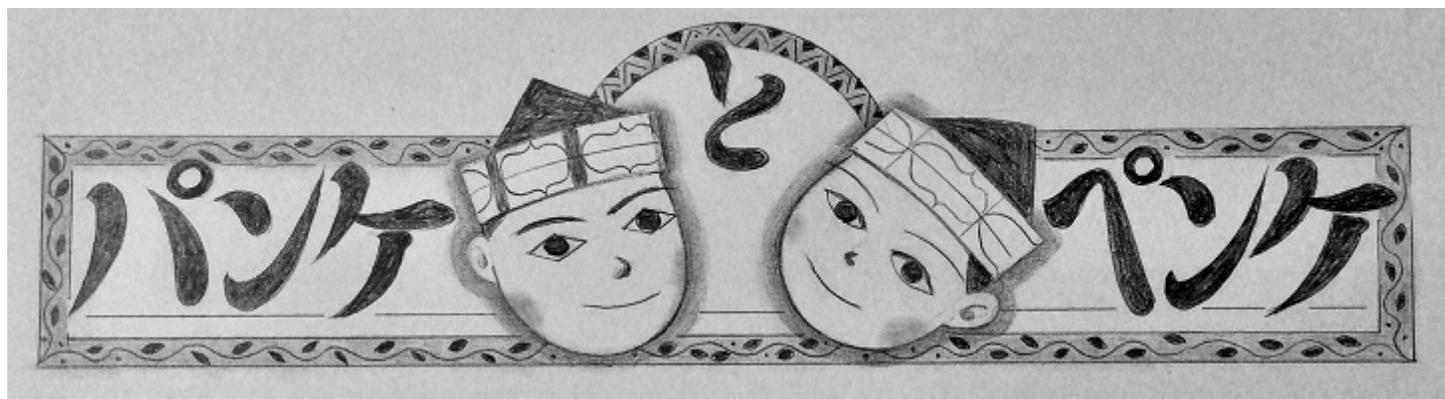
一方のフランス語の単位取得を先延ばしにしていた理由は、ずばり、教授が気に入らなかったのである。一、二年の担当教授は当時売出し中の美術評論家で、東大卒、言葉の端々から伝わってくるエリート意識が鼻についた。三年でようやく担当教授が替わり、ポーランド文学が専門の工藤幸雄さんになった。工藤さんが私にあるとき、「なぜ一、二年で単位を取らなかったの？」とお聞きになったので、「いやあ～、〇〇教授がどうも合わなくて。工藤先生に代わったので、やっと授業に出られるようになりましたっ！」と答えると「〇〇先生は厳しいからねえ」と笑っていらっしやっただのを憶えている。できの悪い生徒だったが、工藤さんから何とか単位をいただくことができた。そしてフランス語はすっかり忘れてしまった。

とはいえ、そこはもちろん嫌な授業ばかりでなく、楽しい授業もあって芸用解剖学の「人間の手足を取ると、その姿はほとんど魚と変わらない」や、西洋建築史における古代から現代に至までの空間把握の変化、キュビズムの時間と空間の概念が、現代建築に大きな影響を与えたことなどは新鮮な驚きだった。視点が移動することによって物体の見え方も変化していくということが、設計の中に組み込まれていったのだ。そのような視線で現代建築を見るといろいろな発見があつて面白い。

四年生のゼミでは精神分析学を受講した。教授は箱崎総一郎さんという精神科医だった。箱崎さんはニューヨークで精神医学を学んだ方で、周りの仲間や教授陣はユダヤ人が多かったそうだ。フロイドの流れを汲む人たちが多かったということだが、年齢を重ねるにつれて箱崎さん自身の関心はフロイドからユングへと移っていったという。フロイドは若者の、ユングは中年以降の心理学だとおっしゃっていたが、私も箱崎さんの影響を受けて、かなりユングの著作を読んだ。特に『心理学と錬金術』は今でも私の中で重要な位置を占めている。ヨーロッパにおける神秘主義や異端思想のおもしろさを知ったのもこの本からだ。箱崎さんはユダヤ神秘主義の「カバラ」の研究もされていて、『カバラ ユダヤ神秘思想の系譜』を出版されている。その中でエリオットの「バートン・ノートン」から〈飛べ 飛べ 飛べ と鳥は言った〉の一節が引用されていて、心に深く刻まれた。今回は時

間がなくて、箱崎さんの著書の中から探しだすことができなかったが、森山泰夫訳の『四つの四重奏』（思潮社）からその部分を引用しておきたい。〈「さあ、もう行きなさい」小鳥が言った、「真実も／度を超すと人間には耐えられないから。」／過去の時も未来の時も、／「そうになっていたかもしれない」ことも「そうになっている」ことも／所詮は同じことで、いつもそこにある。〉私が「詩」というものを強く意識した瞬間であった。

美術大学では卒業論文の代わりに卒業制作を提出することになっていて、私も一年近くを費やして自分の身長ほどの大きさのテンペラ画を描いた。シユールな作品だったと記憶しているが、のちの引っ越しで邪魔になって廃棄してしまって、今はもう存在しない。そうして私は卒業の日を迎え、無事に卒業証書を手に入れたのだった。（続く）



パンケとペンケ（五）

朝かと思ったら0時30分だった。もう眠れない。

ムンヤムニヤ寝返りをうつと、のどかな里と高い木の上に腰かける女の子が見える。

「あれっ、もしかしてペンケちゃん？」

「そうよ」

「大きくなったねえ」

「5つになったの」・・・ひと晩で5年も経ったのか。

「あのおうちに住んでるの？」

「ううん、ペンケにはおうちも着物も食べ物も何にも要らないの」・・・そうか妖精だもんな。

人間と同じ姿みたいだけどと言うと「パンケ兄ちゃんもペンケも、この里の人の思うような姿で生まれて来たの」と教えてくれる。

「あれは里の人のおうちでチセよ。みんなで作るの。いっぱい雪が降ってもあったかいの。前の川はウサル川よ。海の方のウサル（下座）というところに流れて行くの。秋になると大きく黒いお魚がいっぱい来るわよ。チェプよ。チェプも神様だからカムイ・チェプっていうの」

「温泉もあるんだね」

「そうよ。温泉のあるところは土があったかいの。だから雪解けも早く暮らしやすいのよ。昔の人はね、冬の雪深い時に雪の解けているところを探したんだって」・・・賢いなあペンケちゃん。

「ねえペンケねえ、もう少し大きくなったらペンケの里の方に行くのよ。パンケ兄ちゃんはここで、ペンケはペンケの里」

さみしくなっちゃうねと言うと、すぐそこだものいつでも遊べるから平気と言う。

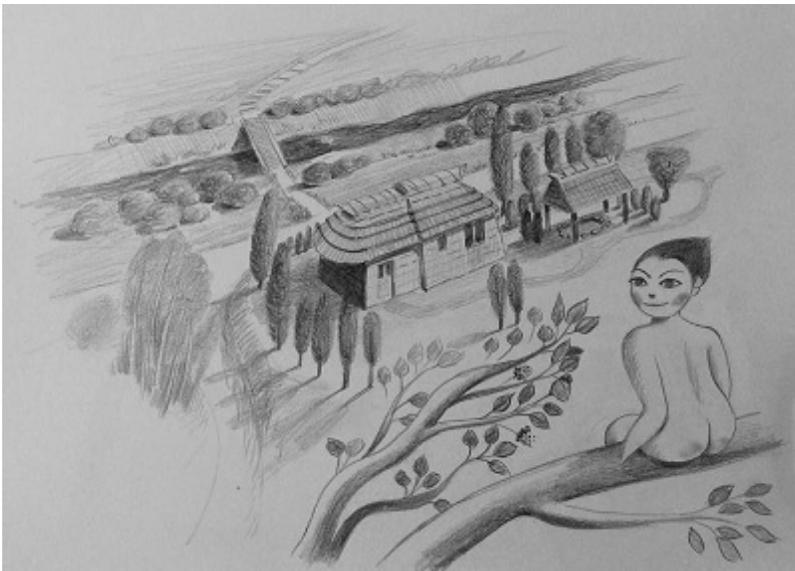
ペンケちゃんは可愛いきれいな声で歌い始めた。

♪スズメの子ヒバリの子 飛びながら 何を見一た

ホーヨホヨヨ ホーヨホヨヨ 春はもうすぐそこ

女の子はやっぱりおしゃべりだねえなんて思いながら、ちょっと幸せな気分になって横になっていた。

♪ホーヨホヨヨ ホーヨホヨヨ 朝はもうすぐそこ



パンケとペンケ（六）

パンケちゃんとペンケちゃんはハリガネムシの神様とペンケの里を見に行った。
ウサル川の支流ペンケ川のほとりにチセと温泉小屋が見える。のどかなのどかな里だ。

「わー、きれい」ペンケちゃんはちよっとルンルン。

ハリガネムシの神様が「ペンケが10歳になったらこの里の人たちと一緒にいてあげるんだよ」と言うと、ペンケちゃんは「はい」とはずむように答える。

「パンケ兄ちゃんも遊びに来てね」「うん来るさ」ふたりとも満足そう。

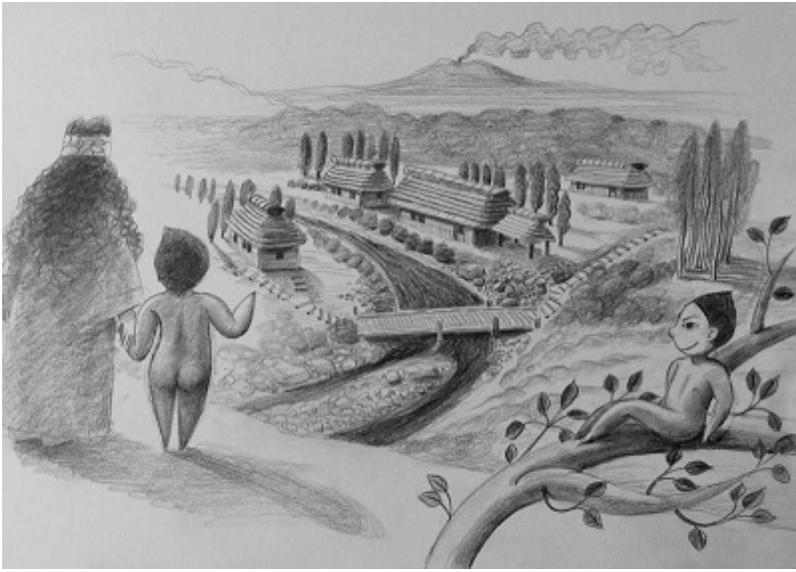
僕はハリガネムシの神様に聞いてみた。「こんな平和な里でも戦争とかあったんですか」ハリガネムシの神様はちよっと顔を曇らせ「やはり人間だから時として闘いもあったんじゃ。戦争も病気もつきものじゃからな」と言う。

「まあそういうことが無いように、この里の人たちにパンケもペンケも求められたんじゃよ」

「パンケちゃん、ペンケちゃんは本当に里の守り神なんですね」

「そうじゃ。戦争だけでなく、若い子どもを亡くしたり思わぬケガをしたりすることもある。パンケやペンケがそばにいることが大きな慰めになればの」

「今はまだ無邪気だが、そのうちいろいろ試練もあるじゃろう」とちよっと気になることを言いながら僕の方を見て笑った。（続く）



序文

美学の領域においては、あらゆる探究が今日では古典的なカントの『判断力批判』の分析に支配されていますが、その洞察力のある細部においては知られていることが余りに少ないのです。尊敬するに足るこの著作を十分に研究した後で、私はこの困難な主題に根本的で永久に獲得されている様に思えないものは何も発見しなかったことを言わなければなりません。しかしながら偉大な思想の要約を言うことは殆ど不可能であり、有益であるよりも常に有害であるので、私は全ての読者に作品そのものに一度戻る様に注意しますが、それでもこの作品で私が述べることを十分に理解して貰うためには、要約する様な研究は全然必要ないのです。同様に、同じ理由によって〈芸術〉についての小論文の選集として見て理解し、体系的領域に縛り付けられずに熟考する機会を見出して頂いても不都合は何もありません。従って表題に決して騙されてはなりません。ここで提示されている数々の表題は、最初から示された上位の何らかの思想に決して依存されていないし、僅かな言葉で全ての芸術を定義出来る何らかの概念へ導くものでもありません。反対に私は従って、それらの相違や分離や対照に気付くのを重視しますが、考証しうる限り作品そのものに従って、各作品が大変良く際立って各作品を明確にするだけです。しかし、取分け堅固なこの主題から運良く生じられる様に思えることは、識別と対照とによって、その関係が相違によって益々緻密にその主題そのものを明らかにしたことでした。そしてこの本の表題にもある体系という言葉が、本当の意味において大変良く表していることでもあります。

カントの学説については、私が引合いに出すまでもなく、何時も意見を同じにして盲従するのを注意すれば十分でした。私がデカルトに発見した、それでもやはり重要な主導理念に関して、私は別な風に行わなければなりませんでしたが、この悟性の王様は当面の主題には全然近づきませんでした。私は人間の能力とか機能としての想像力に関して話したいのですが、それは何よりも人間の身体の中の感情とメカニズムによって定義されるものです。この重要な観念は確かに、体系という精神の無い人間性をきちんと述べ様と試みた人々によって十分には注目して来ませんでした。そして自然の成り行きとして、この観念は〈芸術〉を進んで熟考する人々に知られていません。それ故に連続して分析することは、私には無駄ではないと思えました。しかし、それに倣って諸芸術に関する何らかの規定が、その観念から引き出されると期待してはなりません。何故なら、その規定を与えるのは数々の作品であるからです。従って様々な芸術に関する研究は、第一にここでは提案される想像力の学説に関する確認の様なものになるでしょう。その方法は決して何も証明しようと試みるのがなく、出来る限り提示し表すことにあるので、若い精神の人々を驚かす恐れがありますが、一般には論証や論争によって形作られるものです。それ故に私は第三の注意をここに付け加えなければなりません。

証明したいものは全て証明されるが、本当の困難は証明したいものを知ることです。これらの情熱と偏見の日々においての人間の行為は、余りに明るい光によって照らされました。そしてどんな証明も、私の見る処では名誉を傷付けられるのが余りに明らかですので、私は今後どんな弁舌も断つことにします。ところで学説というものを分析的な説明に連れ戻すもう一つの方法は、あらゆる主題に役立ちますが、美学を論じたいとなるとその方法しかないことに私は昔から気付いていました。何故なら、ここでは選択が全ての因にさせられて揺るがないものであり、作品が美しいことを知るために証明したいと思うことは、疑いもなく作品そのものによって明確であるからです。もしも美を定義したかったなら、即座に確定した最終的な判断力によって定義されなければなりませんし、熟考が照らすこの選択によって私が理解するのは、決して困惑したり変えられたりしないで美が創られる後です。これはこれから考え様とするどんな人も常に求めていることです。しかし、それを持ちたいとどんなに望んでも、真実は決して美に全く帰着しません。従って美は褒美の様なものです。換言すれば、孤立していることが恐らく精神を育てるのです。それ故に、多くの人々にもあることと私は推測する様に、狭いが恐らく全く変

わらない趣味判断を私の本性に見出しましたし、小説や音楽や建築や彫刻やデッサンの数々の対象が常に沢山の出会いの後で、同じ様に完全な賞賛を手に入れていました。その時は外の沢山の人が褒めそやしていても、それと似たものは全て何も手に入れなかったのが、私は結局のところ少しも広くないが堅固なこの領域の上で働く考えを抱きました。全てを説明するこの恐ろしい程の安易さは何時にも信用してはならないので、そこから非常に限定された諸問題に帰して行きました。そして、ここには自由に観察が出来て、如何なる用心も要らない唯一の場合があります。というのも、自然を対象とした観察は、天体の運動とか物体の落下の様に、苦行者の様な準備が無いと直ぐに戯言を言うことが良く知られているからです。要するに美には、存在するという特権があります。そして、頑強なこの世界を形作るために各種類の中に一つの対象、つまり一つの美しい建築物、美しい家具、美しい音楽、美しい詩、美しいデッサン、美しい彫像、美しい肖像画しかないに違いない時も、それらが想定する普遍的関係によって決定的な判断を説明出来ても、最早とんでもないことではないのです。同様に、論理学の基礎を築くためには幾つかの最も単純な命題しかあってはなりません。ところが、そこには対象が抜けているので、それに注意する一流の思索家は中身の無いこれらの形式を直ぐに教え上げて調査したのです。ここでは反対に対象が諸形式の審判者です。精神は真実の体系に従って全ての自分の思想を確認するのであり、それは確かなことです。そこから作品からの知覚が与える安息と確信がやって来ますし、この本も又その必要性を意識的に限定して叙述しているだけです。いずれにしても私は、この孤独な道によって一般的な思想を再発見した様に思えます。従って全ての人々に気に入って貰おうと心配しないで、そして彼らを説得することも少しもしない儘に、彼らと共に思考しました。この出会いは、どんなものを書いても普通にあることです。しかし証明は、一般的観念によって普遍的な一致を準備したい礼儀の様なものです。幸いなことにその様な手管がこの主題において可能でなかったことは、美は決して自らを証明しないからです。

ところで、何も強く主張しなくなると大変に良くある幸運によって私は、もっと後でお読みになるでしょうが、雄弁と散文との相違について熟考する時に、自己のためだけに書く意図において私を強固にする一つの観念に出会いました。それは無敵と思われた原則であり、結局は論理の全ての方法から出発しながら、証明とか議論とか演繹は、この最後の言葉である演繹が十分説明している様に、本来は雄弁の方法です。私が公の言葉と理解するのは、書かれた雄弁は一種の怪物であるからです。支配したり弁護したりするための技術が説得するための言葉の中では一番古いものの一つであるのが明白であるので、人間の秩序が最初の認識でした。そして、未だに全ての人々にとっての最初の認識でもある以上、雄弁家が思考する最初の先生であったとしても、そして入念に工夫を凝らした散文が最初は演説の一種であったとしても、最も急を要するものや身近なものや柔軟なものは奇跡にはなりません。それは「もっともであって、正しい」という決まり文句に、大変に奇妙ですがためになる意味を与えたのです。以上のことから、この証明偏執狂が既に数学において圧制を加えていますが、ご存じの様にここでは問題にするものは何でも一つ一つ明確に分かるや否や、知り得ることは全て知るの明白です。かくして私たちの当初の認識は、外部秩序に関係しながら口頭弁論や証明の形式を取ったのです。それは法律が訴訟に先行したり、裁く必要性が数々の原則を問題の状態に絶えず戻したりするのを禁じる人間の秩序の怪しくて曲げ易い物事にとっては少なくともきちんとしています。時間の中で進展する雄弁がそのことによって、原則から結果までの進行だけを同様に要求することは別です。これに対して真の散文は少なくとも思考する機会を与えますし、そのことに注意すれば非常に力強い警告にもなります。

最も幼い精神は、論拠も証明も無く思考します。その精神を外の色々な精神と分けているのは、雄弁の形式以外にありません。彼において、そして彼にとってはどんな考えも普遍的なのです。そして共通した誤りは、恐らく司祭たちが垣間見た様に決して精神を信じたくないと思うことです。何故なら普遍的なものは決して証明されないからです。証明したい者は何時も自分の証明が普遍的に有効であることを仮定するものですが、決して証明しようと試みません。一般的なものだけが証明の対象であり、実際的な一致を導いているだけです。人間の秩序と比較しては政治的であり、外部の秩序と比較しては産業的であると理解して下さい。権利の平等によって間に合わせの平和を生むことが出来るし、設計図と鉄があれば偶々同一の機械を何回でも製造することが出来るの

です。しかしその様な成功は決して精神を満足させません。私が知覚したい木は現実のものとしての木であり、つまり普遍的なものでもあり、従って私は独りでも皆と一緒にでも、単独の観念を幾つも創ってみたいと強く望みます。芸術作品を証明するものとは常に特異で普遍的なものです。歌われ、デッサンされ、真似され、形にされ、描かれた数々の言語に限定されます。それらの言語の中での文節言語は極めて深く区別されます。昔からの合図である様々な叫びは常に思考を保留にしたり、色々な努力を調整したりすることになります。それ故に雄弁の道具に帰した美学は、芸術作品がその固有の言葉で大変上手に言っていることを、大変下手に言うのです。そして雄弁そのものも、雄弁のことを言うことしか知らないのです。

その様に芸術と思想の間に乖離が生じます。しかし、それは感情を表す言葉が意味として非常に豊富でも、十分に理解させてくれる様に外見上のものでしかありません。次に堅固な思想は共通の表現にしか形を整えないと考えたなら、しるしに関する美德を良く理解するでしょうし、それらの各思想は決して別々にならず、そこから共通していない思想は如何なる意味においても思想ではないのです。舞踊や物真似や音楽という古代の言い方が以上のことを証明していますが、表現も同意も一つのことしか成していないのは極めて明瞭です。そして寺院や彫像やデッサンというそれらの力強い文字は、狂った王に対してダヴィデの豎琴が成した様に、戯言をお仕舞いにして、証明もなく変えるための力を守りました。書き言葉に代わる見本は未だ完全に対象になっていません。それ故に作品は、普遍的で永続性がある状態に分節言語を連れ戻さなければなりません。真の散文という美の輝きは証明のない真実を提供していると指摘出来ますし、その意味では美しい音楽の証明もなく、ミロのヴィーナスにも証明がありません。しかしこれらの美は又、見本と言うよりも寧ろ奨励です。かくして模倣出来ないものだけが教えます。

これから述べることはこの道に沿っていて、この方向へ向かうものです。しかし、種類を限定しているのであって個別のものではないので、媒介的なものでしかありません。というのも、ここで追求する目的は各種類の作品の個別の性格及び対立するものの力によって、決して論理的ではなくて現実的である体系的な統一性の中で、その偉大な対象を知覚させることであるからです。批評は最早行えないかも知れず、この試論も又まさにそれ以下を行うものであることを、読者であるあなたにお知らせします。それ故に、もしも眠っている才能があなたを起こしたなら、寧ろペンとか絵筆を取って下さい。でも、もしもあなたの才能が無駄話をするのであるなら、その時は本書をお読み下さい。（完）

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

宿谷 志郎（しゅくやしろう）

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなろ」（催華国氏経営）を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のPRを担当し演奏会のポスターなどをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビクトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パール」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二年廃業。一年半の休養後、革工芸（革絵）を始める。二〇一七年より北海道に半年の移住を繰り返し専念。趣味はフルーツ。よく聴く音楽はバッハ、モーツアルトの作品。

神宮 清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんで来て、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島 りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都中野区在住。

日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年 待望社 第32回福田正夫賞）

装幀家（高島鯉水子）

究極の趣味はキックボクシング（アマチュア）！最近試合に出ていないが...

高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇

○四年)、『七〇年代の雨』(二〇一〇年)。評論集『現代詩再考』(A&E・二〇〇四年)。翻訳『アランの「エチュード」』(創新社・一九八四年)、アラン『初期プロボ集』(土曜美術社出版販売・二〇〇五年)、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』(文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年)。共同編纂『齋藤志詩全集』(土曜美術社出版販売・二〇〇七年)。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞(評論部門)。二〇一二年からパプーの電子書籍に、随想集『アランと共に』(全3巻)及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロボ』(全5巻)『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

富永 たか子(とみながたかこ)

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回遊」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』(第二回横浜詩人会賞受賞)

②『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾 雅樹(ながおまさき)

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

樺自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』(共著)

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』(韓国・呉世榮)他

原 詩夏至(はらしげし)

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』(共著)、句集『マルガリータ』『火の蛇』(第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞)、歌集『レトロボリス』(第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞)『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄(みうらいつお)

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊(東京・銀座)、東邦画廊(東京・京橋)他で作品を発表する。

(以上)

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第61号

2019年8月21日 登録

<http://p.booklog.jp/book/128260>

編集：風狂の会 (担当：高村昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/128260>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト